

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館研究報告別冊 no.020; はじめに

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松原, 正毅, 小長谷, 有紀, 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3666

はじめに

はじめに

松原 正毅・小長谷有紀・佐々木史郎

本論集は平成7年度(1995年度)に始まったユーラシアの遊牧社会に関する本館の共同研究、「ユーラシアにおける遊牧民族形成の歴史民族学的研究」(平成5年～7年、代表者：小長谷有紀)の成果報告書である。ユーラシア、とりわけ内陸アジア・北アジアの遊牧社会に関する本館の共同研究は既に平成元年から本格的に始まっており、「遊牧の歴史と現在」(平成元年～3年、代表者：松原正毅)、「遊牧の歴史民族学的研究」(平成4年～6年、代表者：松原正毅)と2つの研究会が組織され、本研究はその3番目である。

内陸アジア・北アジアの遊牧社会に関する研究は、1989年(平成元年)に共同研究が開始された頃から、大きくその状況を変えてきた。一連の共同研究と本書で扱う遊牧社会が展開してきた地域は長らくソ連(ソビエト社会主義共和国連邦)、中国(中華人民共和国)、モンゴル人民共和国という社会主義あるいは共産主義を国是とする国家の領土に包含されていた。内陸アジア・北アジアといってもその定義は様々であるが、本館の一連の共同研究で対象とされたのは、だいたい現在の中国内蒙古自治区と新疆ウイグル自治区、モンゴル国、ロシア領のシベリア(特にシベリア東部から西南部にかけて)、そして現在は独立国家となっているカザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、キルギススタン、トルクメニスタンに当たる地域で遊牧活動を展開する(あるいは、していた)人々である(これらの国々、地域の周辺のアフガニスタン、イラン、トルコ、カフカス諸国あたりの人々も時には対象とされることもあった)。これらの地域は現在の中国領になっている地域を除いて、1920年代から社会主義体制下に包摂され、中国でも1949年には社会主義政権が樹立された。そして第二次世界大戦後、米ソ対立を軸とした冷戦が厳しさを増すにつれて、中ソ対立やソ連、中国内部における民族対立などという要素も加わって、西側外国人にはなかなか立ち入ることすらできない、閉鎖地域とされていった。

その間、現地調査を必要とする文化人類学的な研究や考古学的な研究は、我が国では完全に停滞した。歴史学や文献学のような文書資料を中心とする研究は着実に積み上げられてはいたが、それでも社会主義諸国では文献類や文書類の閲覧まで制限していたことから、そのような国々の図書館、文書館、大学などの史料へのアクセスは非

常に難しかった。

そのような状況はソ連で始まるペレストロイカ政策によって1985年以降徐々に改善してはいったが、それを急激に変えたのは、1991年暮れのソ連崩壊と冷戦の終結であった。旧ソ連地域とモンゴル地域が、旧西側外国人研究者にも調査地として続々と開放されたのである。また、同じ頃中国でも「改革開放路線」の進展によって、旧ソ連地域ほど急激ではなかったが、「未開放地域」が縮小し、ここでもまた実地調査の可能性が大きく広がった。そして、調査地の開放に伴い、文書類の取り扱いも開放的となり、従来使えなかった文書が公開されて、文献研究の幅も大いに広がった。

このような政治情勢の劇的な変化と研究環境の好転は、本館での内陸アジア・北アジアの遊牧社会の研究にも大きな転機をもたらした。平成元年度に始まった共同研究では、旧社会主義諸国の開放によって可能になった実地調査や新たに公開された文献類を基にした研究が中心となった。そして、共同研究と平行して調査プロジェクトも組まれた。既に昭和63年度（1988年度）には文部省科学研究費補助金による調査として「中国内蒙古鄂温克族の言語文化に関する実地研究」（代表者：黒田信一郎北海道大学文学部助教授、本館客員助教授（当時））が始まっていたが、平成3年度（1991年度）には同じ科研によるプロジェクトである「アルタイ・天山地域における遊牧の歴史民族学的研究」（代表者：松原正毅本館第1研究部教授（当時））が始まり、シベリア、新疆、モンゴルなどでの民族学、文化人類学、考古学、言語学の分野での調査が本格化した。本書に成果が盛り込まれている共同研究はアルタイ・天山プロジェクトによって側面からサポートされている。

調査が開始された当初は、冷戦終結後の社会経済的な混乱のために、満足な調査ができず、現地を訪問することに意義があるような結果に終わるケースもあった。しかし、その後調査回数を重ね、プロジェクトを更新していく中で、調査体制も整備され、調査される人々の側にも理解が生まれることで、実地調査から成果を上げるための条件は整いつつある。本書は、1988年に科研による本格的な調査が始まって以来、10年近くにわたって旧ソ連地域やモンゴル、中国などで展開されてきた内陸アジア・北アジアの遊牧社会研究全体の成果であるともいえる。

内陸アジア・北アジアの遊牧社会といっても実に多様である。まず第一に地域そのものが広大であることから、自然環境とそれに対応した生態系が異なる。すなわち、砂漠となる極度の乾燥地帯（ゴビ、タクラマカン、カラクームなど）、遊牧には最適の草原地帯（モンゴル高原、天山地方、呼倫貝爾草原など）、山岳地帯（サヤン、アルタイ、天山、崑崙など）が複雑に交差し、北方には広大な森林地帯（タイガ）が砂

はじめに

漠や草原を押さえる。そしてさらにその北にはツンドラが広がる。「遊牧民」といえば草原地帯や乾燥地帯で馬に乗り、ヒツジやヤギの群を追う人々を連想する人が多いかもしれないが、シベリアの森林とツンドラにはトナカイの群を追う遊牧民が活動している。

「遊牧」とは一つのライフスタイルであり、文化である。基本的には群生して移動する大型の有蹄類の動物を家畜として飼い、その家畜の群を移動させながら、自らも一ヶ所に居を構えずに移動して歩く。生活は家畜に大きく依存することになり、そのために家畜の管理技術が発達し、さらにそれに関する知識が豊かになる。移動生活を続けるために住居は天幕の類である。このような共通点が見られる一方で、個々の遊牧社会は実に多彩である。自然環境が異なれば当然飼う家畜の種類が異なり、また管理方法も異なる。その歴史的な経緯によって文化も言語も異なる。内陸アジア・北アジアの遊牧民は言語によってテュルク系、モンゴル系、イラン系、ツングース系、ウラル系、そして古アジア系に分類できる（いうまでもなく、イラン系の言語はインド・ヨーロッパ語族に分類され、テュルク、モンゴル、ツングースはアルタイ諸語としてまとめられる）。しかし、長い間繰り返されてきた移動や移住、集団間の離合集散の結果、その分布は非常に複雑に入り組んでいる。

これらの諸言語集団の中で、歴史上幾度となく巨大な軍事集団を組織して周辺の農耕諸民族や国家を脅かし、あるいは帝国を築いて彼らを支配したことで知られるのは、テュルク系とモンゴル系の遊牧諸民族である。それだけに彼らに関する研究には歴史学だけでなく、言語学、考古学、民族学の各方面で膨大な研究の蓄積が見られる。しかし、彼らの活動した地域は非常に広大であり、彼らの残した遺跡、遺物類はなお多くが手つかずのまま眠っている。また、彼らに関する記録も解読、分析を要するものが相当量残されている。しかも、冷戦時代にはそのほとんどが外国人に対しては隔離状態にあったために、調査研究の手が付けられていない地域や分野はまだ数多く残されている。この地域が政治的に開放された今日、従来の研究の蓄積を基礎にして、新たに可能になった実地調査や公開された文書記録を活かせば、さらに大きな成果を期待できる。

本館の共同研究でも、このテュルク系遊牧民とモンゴル系遊牧民に特に重点を置いて研究会が進められてきた。そのことから、本書でもテュルク系遊牧民とモンゴル系遊牧民を扱った論文をまとめて配列した。まず第1部は「モンゴル研究のパラダイム」として、モンゴル社会を文化人類学的な視点で、あるいは方法論を援用して解釈するような論考を配し、さらにモンゴルの社会や文化を知る上で重要な情報源ともなる貴

重要な史料を提示するコーナーを設けた。それに対して第2部は「テュルク研究への新視点」と題して、新史料に基づくテュルク系遊牧民の歴史学的な研究をまとめ、さらに、テュルク系遊牧民がかつて数々の帝国を築いてきた地域の古代、中世遺跡に関する近年の実地調査に基づく成果を配した。最後の第3部はテュルク、モンゴル系以外の遊牧社会の研究をまとめたが、そこでは言語系統の同一性による社会、文化の共通性を求めるのではなく、遊牧という活動に見られる普遍的な特徴と、地域、言語系統ごとの個別的特徴を見極めつつ、理論的な考察を行うことをめざしている。

各論考とも独自の資料や史料を駆使し、新たな視点や方法論を導入して論を組み立てた力作ばかりである。しかし、本論集によってこの10年余りの本館を中心としたユーラシア（内陸アジア・北アジア）遊牧社会に関する共同研究が完結するわけではない。この研究は新しい局面を迎えたばかりであり、民族学、文化人類学、歴史学、考古学、言語学等の分野を問わず、これから大いに発展の余地を残している。編者達はこの論集がその発展の礎となることを願うものである。

なお、本論集を通じて固有名詞や術語に一部不統一が見られるかもしれないが、それを敢えて機械的に統一しなかったのは、各論考の著者の意図を重んじたためであり、また、編者側で一応許容範囲内のズレであると判断したためでもある。しかし、なお編者の見落としなどによる不備もあるかもしれない。忌憚なくご叱正いただければ幸いである。